

モンゴル研究への苦難の道のり

風戸真理

カルムイキアからモンゴルへ

一九九三年四月、当時二回生だった私は教養部A号館で「今年の夏、中央アジアに行く」とうたったピラをみつけた。井出晃憲さん（一九九一年入学）の作った探検部の新歓ピラだった。この一枚のピラとの出会いが、現在、モンゴルの牧畜について博士論文を書いている私の出発点になっている。

一九九三年夏、井出さん、安達毅さん（一九八八年入学）、水越祐一さん（一九九二年入学）とともに、私はロシアとキルギスタン、ウズベキスタンを旅した。なかでも私の生き方に強い影響を与えたのはカルムイキア共和国を訪問したことだった。カルムイキアは、ロシア連邦のなかでもヨーロッパ・ロシアに属するカスピ海北西岸に位置するが、そこに住むのはモンゴル系でチベット仏教を信仰するハリムク人らである。カルムイキアに強い関心をもっていた井出さんと、そこに住むロシア人の女子ジェーニャと

高校生のときから文通してきた私は、「カルムイキアに行こう！」と意気投合して準備をはじめた。京都から、カルムイキアの大統領キルサン・イリユムジノフ氏に手紙を送った。

モスクワに着くと、各地への航空券の確保および独立したてのキルギスタンとウズベキスタンのビザ取得のため、不慣れた街で奔走し、多くの時間を行列に並ぶことで費やした。その間にチベット仏教を学ぶロシア人青年リョーシャと知り合った。彼は私たちを家に泊めてくれた。だが二日目の晩、ナイフと銃を持ったカフカース系マフィア三人が家に押し入った。井出さんは体にナイフを突きつけられ、私たちは金目のものをみんな奪われてしまった。リョーシャも驚いて何度も詫言したが、誰がマフィアの手引をしたのかはいまわからない。

そしてやつとカルムイキアの首都エリスタにたどり着いた。ジェーニヤが空港に迎えに来て家に連れていってくれた。ジェーニヤは聡明かつ社交的で、ロシア人・ハリムク人両方の友達が大勢いた。

大統領への手紙も届いていた。本人は出張中だったが、大統領補佐官であるお兄さんと会えた。「ステップを見たい」とお願いすると、翌日迎えの自動車が現れて私たちをステップに連れ出してくれた。ヨモギ属の草の香がぶんぶんするステップを走った。そして協同組合農場の生産評価パーティーに招待された。

だがこの旅で最も重要だったのは同世代の若者たちとの出会いだった。ソ連と日本で育った私たちは互いに「向こう側」の社会での生活に興味津々で、つたない英語で力を尽くして語り合った。ハリムク人の若者たちは「チングス・ハンは私たちの先祖だ」と繰り返して語った。とくに青年バドマが「モンゴル高

原は祖先の故地です。モンゴル国はわれわれモンゴル民族がもつ唯一の独立国です。モンゴルは私にとつて夢の国なのです」と語ったことは忘れられない。このとき、モンゴル国への憧れが私のなかに芽ばえはじめた。

一九九四年夏、私はモンゴル国を訪れた。そして一九九六年には京都大学大学院人間・環境学研究所の人類学講座に進学し、本格的にモンゴルの研究をはじめていまにいたる。そんな私の来し方は、モンゴル遊牧世界に魅せられて夢中で歩んできた幸せな道のりにみえるかもしれない。

けれどもモンゴルでの私のフィールドワークの経験には苦しみに満ちた一面がある。そのことが、当時アフリカで調査していた先輩Yさん宛の一九九七年一月八日付の手紙に克明に記されている。何度も読みかえし、直した跡の残るこの手紙は、結局投函することができなくいまも私の手元にある。私はモンゴルにたいして、畏敬やつくしみと、恐怖や憎悪という相反する気持ちを抱きながらこれまでかかわってきた。このような、モンゴルという異文化への私の挑戦の原点となった、最初の長期調査のとくにはじめの六カ月の経験を、Yさんへの手紙から紹介したい。

調査の概要としては、私は一九九七年四月から一九九九年三月まで京都大学を休学してモンゴル国に渡った。モンゴル国立大学に所属して、調査のために多くの時間を地方の遊牧民とともにすごした。一九九七年二月の一時帰京までの一六二日間はアルハンガイ県チョロト郡X行政区（以下、X地区とする）で暮らした。

*

一九九七年一月八日
前略Y様、

九月一日、X地区には初雪が降りました。短い夏が終わり、寒く厳しい季節が始まりました。私は先日、五月からつきあってきた家族に追い出されてしまいました。こんなことになってしまった経緯をX地区に来た当初から順を追ってお話しします。

一、モンゴル遊牧民のなかへ

五月にX地区に来てすぐ、「自分の家に来ないか」と誘ってくれたBW(当時、三二歳)のゲルに住み込みを始めました。BWの家族には、妻(三二歳)、息子(一二歳)、娘(〇歳)がいました。BWらの夏营地には、BW家、MD家(BWの父の家)、HZ家(BWの妹夫婦の家)、BWの義父の家、の四世帯がありました。

「家畜の放牧に行きたい」と言うと、BWは馬群の探索に連れて行ってくれました。だがキャンプから見えない山の中で「キスしよう」と酒臭い息でからまれました。力一杯押しのけました。その数日後、BW家の赤ちゃんが亡くなり、これをきっかけとしてBWは酒に溺れました。知人の家で酒をねだって飲み続け、「一人目の子が死んだ」と泣きながら何日間も放浪し、泥酔して帰っては義父や家族に暴力を振りました。BWが帰らない日、妻は無口で食事も作りませんでした。

BWは酔うと「おれは二人の妻をもっている」と豪語し、人々は「BWの子がまた死んだのは、あいつが外国人と寝た祟りだ」と噂しました。BWの妻は私を嫌うようになりました。針のむしろでした。でも「人の生活には困難がつきものだ。調査のため、逃げてはいけない」と自分を叱咤してBW家に三カ月間とどまりました。

私がX地区に来たばかりの頃、人々は私を珍しがって私に何でもさせてくれました。だがやがて人々は私に「モンゴルの女らしく」振る舞う一家事、搾乳、乳加工、子守を手伝って直径約二〇〇mのキャンプ内で日々を過ごす一ことを期待するようになりました。私はX地区をくまなく歩き、何でも数えて計る生態人類学的方法でモンゴルの牧畜を調査しようと思っていました。家を離れて歩き回るのは「女らしく」ないのでやめるよう言われました。

二、日帰り放牧の調査

それでも私はBWらの夏营地にいたウシ・ヒツジ・ヤギ・ウマすべてを写真に撮り、これを京大カードに貼って性別・年齢などを書き込み、三四〇枚の個体カードを作りました。

八月末、X地区では夏营地から秋营地への移動シーズンに入りました。BW家と義父の家はそれぞれ行政区の中心地の近くへ移動しました。MD家とHZ家は夏营地から約一〇キロ離れた沢の中へ一緒に移動しました。この頃、私は日中のほとんどをMD家で過ごしており、また個体カードを作った

家畜の観察を続けたかったので、MD家に移り住みました。

MDらの秋営地で、私は日帰り放牧中のヒツジ・ヤギの行動とそれを導く人間である「牧童」の行動調査を開始しました。モンゴルではヒツジとヤギは一つの放牧群として管理され、まとめて「ヒツジ」と呼ばれます（これを以下、ヒツジと呼ぶ）。このキャンプには一九四頭のヒツジと八六頭のヤギがいました（九月四日調べ）。牧童は、MD家の息子BT（一五歳）とHZ（二六歳）とが交代で担当しました。私は放牧に同行し始めました。

女性の領域にとどまらず、草原を歩き回る私を人々はよく思いまませんでした。それでも私が出かけると、「ヒツジについて歩くなら群れをそことあそこへ連れて行き、それからキャンプに連れて来い」と牧童の仕事の肩代わり命じられました。最初は牧童を手伝っていましたが、ある日、「モンゴルの牧童がどのように群れを統率しているか知りたいので、私は群れを追わない」と言つて手出しをやめました。すると「役立たず」と言われました。

そこで私は、自分の調査についてきちんと説明しました。「私は、モンゴルの遊牧民がどうやって家畜、とくにヒツジを放牧しているのかを調べるために来た。それで放牧について行き、牧童が家畜に対してどんな風に叫んだり追い立てたりしているのか、また家畜が何をしているのかを時間を計つて記録している。私の先生たちはアフリカでヤギの放牧について歩き、本（論文）を書いた。私はX地区での放牧のしかたをノートに書いて帰り、本を書く」。

これを聞いてMDは、「ノートを先生に提出すると三とか四とか成績がつくのか」とたずねました。

私は、「ノートを見て自分で本を書き、先生はそれに成績をつける」と答えました。HZは「日本の雑誌におれの写真を載せるのか」と言いました。モンゴルは社会主義期に日本を仮想敵国としており、HZは政治的な危険を恐れているようでした。私は、「今はモンゴルと日本は友だちだ」と説明しました。女性たちは、「モンゴルでは汚れた服を着ておかしな行動をしているが、日本に帰れば化粧をして、たくさんのきれいなスカートを毎日取り替えて着るのか」、「いつ結婚するのか」などとたずねました。

九月中旬から雪の降る日が多くなりました。日帰り放牧の観察とは、標高約二〇〇〇メートルの谷の中を上下しながら一〇〜一五キロ歩き、かつ集中して八〜一〇時間記録を続けることで、夕方には疲労困憊します。MD家では日が暮れると蠟燭を灯し、日に一度の食事をみんなで食べておしゃべりしますが、私はリヒトの光でノート整理をしました。秋には人の往来も減り、毎日会うのはMD家とHZ家の大人四人、子ども六人だけとなりました。

三、事件

一〇月六日、牧童のBTが馬群の様子を見るため一時的にヒツジの群れから離れた時、MDらのヒツジ放牧群が近くにいた隣のキャンプの放牧群と混ざってしまいました。私とその過程を書き留めていると、BTが戻ってきて「なぜ混ざり合いを止めない」と怒鳴りました。

帰宅後、BTは母（でありMDの妻である）dz（四七歳）に、「マリ姉さんがヒツジを驚かせて隣のキ

キャンプの群れと混ざらせた」とウソの報告をしました。隣のキャンプの人々も来ていて、両群が混ざるのを止めなかった私を責めました。dzは、「おまえが群れを追いかけるから、うちの群れが驚いてよその群れと混ざる」と言い放ちました。「私は群れに影響がないよう離れて静かに見えています。決して群れを驚かせません」と懸命に訴えました。

でもいつしか私の調査を許容してくれるのはMDだけになりました。彼は最後まで私の質問に丁寧に答え、またモンゴルの歴史や習慣そして彼自身の人生経験をすすんで語ってくれました。しかし、耳の遠いMDとモンゴル語が下手な私が「え？」を連発しながら大声で話していると、dzが「うるさい！ やめろ、やめろ！ どうせわからないんだから」と言っただけで会話を遮りました。

四、MD家との別れ

MDらは一〇月末に冬営地への移動を予定していました。これが潮時だと感じていましたが、冬営地での生活を一目見たくもありました。dzに「あなた方の冬営地で一週間過ごし、一月七日に荷物をもって行政区の中心地へ去りたい。いいか」とたずねました。dzは「自分自身で知れ」と答えました。承諾や拒絶の代わりによく使われる文句でした。

これまでBW家やMD家には食費として、小麦粉一袋(五〇キロ)相当の食料品が現金(九〇〇〇モンゴル・トゥグルク約九〇〇円)を毎月渡していました。最初、私は滞在費の相談をMDにもちかけま

した。するとMDは「おまえはわれわれの客だ。好きなだけいて、食べなさい」と言いました。誇り高い人でした。一〇月末、私はdzにお金を渡しました。彼女はとても喜び、上機嫌で私に二時間も昔話をしました。

それから私は郡の中心地へ出かけて五日間を過ごしました。一月一日、すでに冬営地へ移動していたMD家をたずねると、MDは私に、「ここではオオカミが頻出し、子どもが外で遊ぶのも危険だ。おまえも今までのように草原を歩いてはいけない」と言いました。ところがMDは私を送ってきた友人にそつと「あれを連れて帰れ」と言ったそうです。けれどもすでに日は暮れており、その晩は泊まることになりました。私は「あと一週間いたい」と懇願しました。するとMDは私に「ヒツジの放牧に行くか」と聞きました。「行きます」と答えると、「ヒツジの放牧に行かないならいてもいいが、行くというならダメだ」とdzが言いました。

出発の朝、両家の妻たちがそれぞれ私に山積みの乾燥乳製品を黙って渡しました。私も黙って受け取りました。モンゴルの草原で客人が去るときに行われる儀式でした。その重さをとおして私は、彼らと私は尊敬しあう主人と客人として二カ月間をとともに過ごし、いま、客人は主人のもとを去ったのだと悟りました。

五、六カ月を振り返って

いま、悲しくやるせない気持ちと申し訳ない気持ちとでいっぱいです。無理な調査で大切な人たちとの関係を壊してしまいました。

そして心も体も疲れています。六カ月間、ゲルという三六〇度見渡せる直径六メートルの円形空間で三、五人の家族と文字通り寝食を共にしました。一人になりたくて草原を散歩しても、その姿が遠くから見られていて「女性が手を後ろに組んではいけない」と注意されました。一方キャンプから離れたときはいつも、酔っぱらいに襲われなかと恐れていました。体にはシラミやダニがいていつも痒く、体力も限界です。

暗い手紙になりましたが、これが私の近況です。あと一〇日で一月最後の郵便配達車がかかります。これに乗って県を中心に、そこで首都行きの自動車をみつけます。

Yさん、お体に気をつけてよい調査をなさって下さい。またお便り下さい。さようなら。

風戸真理

その後、一九九八年二、四月、一九九九年三、四月にふたたびX地区を訪れた。合計二四〇日間のX地区での調査の結果は修士論文「モンゴル国の牧民の遊動と家畜管理―人と家畜の離合集散―」としてまとめた。

いま思えばYさんに手紙を書いたところは、慣れない生活様式、新しい人々との関係、そして限られた時間での調査といった多くのプレッシャーのもと、全部に体当たりし、全部に失敗していた。人類学では、調査地の人々と信頼関係を築いたうえで調査をすることになっている。だがそう簡単にはいかない。当時私は、異文化を調査するならば現地にはいりこんでその一員となるべきだと思っていた。このためX地区では、「モンゴルの女らしく」あれという要求へ応えることと、自分の調査をすることとの折り合いがつけられずに苦しんだ。調査者というのは、旅行者とも現地社会の一員とも異なる。調査者という振る舞いには铸型がなく、自分自身が相手との交渉のなかで実践しながら創出していかなければならないポジションだろう。未熟だった私がX地区の人々をふりまわしてしまったのは、現地人にも調査者にもなりたくて、なりきれない私自身の迷える態度だったのかもしれない。

私が中学に入学したのはゴルバチョフが世界に登場した年である。ペレストロイカによって開かれはじめたソビエト・ロシアに強く惹かれ、ソ連の女の子と文通をはじめた。ところが彼女の住むカルムイクアはソ連やロシアであるだけでなく、ある意味で「モンゴル」でもあった。私は、カルムイクアの友人らによってモンゴルへ、探検部の仲間によって人類学へと導かれてきた。調査地としてのモンゴルは、決して居心地のよいところではない。だが、私自身が歩いてきてたどり着いた場所である。

部創設50周年記念出版

京大探検部「一九五六—二〇〇六」

発行日——二〇〇六年三月十五日初版

編者——京大探検者の会

編集協力——株式会社 エス・プロジェクト

電話☎〇三二三三二一〇八〇〇代表

発行——株式会社 新樹社

〒二二〇〇一五 東京都文京区目白台一上三三十五

電話☎〇三三九四一一二〇三 ファクス☎〇三三三九四一一三二〇七

振替☎〇〇一〇〇一八一五五七一

印刷製本——株式会社 シナノ

◆不許可複製禁無断転載 ISBN4-7875-8547-9

部創設50周年記念出版

京大探検部

【1956-2006】

京大探検者の会 [編]



われらはなぜ海外遠征を志したか

梅棹忠夫、本多勝一、石毛直道はじめ
歴代顧問・部員など38人が証言する
それぞれの「時代」と「探検」。

新樹社 ◆ 定価 [本体2800円 + 税]

部創設50周年
記念出版

京大探検部

【1956-2006】



9784787585479



1920095028002

ISBN4-7875-8547-9

C0095 ¥2800E

定価「本体2800円 + 税」



【京大探検部の足跡】

- ◆1956年—3月5日、探検部創設。
京都大学・バンジャブ大学合同西カラコラム・東ヒンズークシ探検隊。
京都大学イラン学術調査隊。
- ◆1957年—京都大学スワート・ヒマラヤ探検隊。
- ◆1960年—京都大学トンガ王国学術調査隊。
- ◆1961年—京都大学探検部チモール島調査隊。セイロン・マルディブ隊。
- ◆1962年—大阪市立大学・京都大学合同カンボジャ学術調査隊。カナダ隊。
- ◆1963年—京都大学ボルネオ学術調査隊。
京都大学西イリアン学術探検隊予備踏査隊(主催団体は京都大学生物誌研究会)。
- ◆1968年—京都大学アンデス学術調査隊。
- ◆1985年—青蔵高原揚子江源流域・唐古拉山脉学術登山隊。

われらはなぜ
海外遠征を
志したか

新樹社